

資格・検定試験における長文読解用英文の難易度比較

秦野 進一 (東北大学)

資格・検定試験で使用されている長文読解用の英文を分析し、文章と語彙の難易度を比較・検討した。その結果、それぞれの試験で使用されている長文読解用の英文の文章、語彙の難易度にはかなりの差があることが判明した。文章、語彙のどちらに関しても、センター試験とほぼ同レベルの難易度のものから、センター試験より難易度の高い東北大学の前期個別試験と同レベルの難易度のものまでであった。また同程度の難易度の英文を複数使用している資格・検定試験もあれば、難易度に差のある英文を複数使用している資格・検定試験もあることがわかった。

1. はじめに

2020 年度より現在のセンター試験に代わる大学入学共通テストが始まり、同時に民間業者による英語の資格・検定試験の本格的な利用も始まる。受験生が個々の資格・検定試験の目的や特徴を理解したうえで利用する試験を選ぶことが望ましいが、現状ではこれらの試験について十分理解されているとはいえない。

これまで英語の入試問題に関する研究では、英文と語彙の難易度について多くの研究が行われてきた。英文の難易度を測定するためには、Flesch Reading Ease などのリーダビリティ指標が用いられ、語彙の難易度を測定するためには何らかの語彙データベースを用いてカバー率を測定するなどの方法が取られてきた。例えば Kikuchi (2006) は、国立・私立の 1994 年と 2004 年の個別試験の問題について、3つのリーダビリティ指標を用いて分析し、2つの年の難易度はほぼ同じであり、そのレベルは英語の母語話者にとっても大変難しいレベルであると報告している。また長谷川 (2011) は、大学入試センター試験と個別試験で使用される語彙について、中学・高校の英語教科書語彙と British National Corpus を用いて分析し、「難しかった」と言われた 2009 年のセンター試験の問題は、中学・高校の英語教科書語彙でのカバー率が 91.8%と例年より低かったこと、個別大学入試問題の難易度レベルは中学・高校英語教科書と比較して明らかに難易度が高いことを報告している。

入試問題と同様に中学・高校の教科書を対象に英文や語彙の難易度を分析する研究も進められてきた。例えば根岸 (2015) は、中学・高校・大学の英語教科書と大学入試センター試験および個別入試の英文についてリーダビリティを比較し、中学3年と高校1年の間には大きなギャップが存在すること、センター試験の難易度は、高校の上のレベルの教科書の平均的難易度よりもやや高く、英語力の上位層の受験者の弁別が必

要と思われる国立大学の入試問題はセンター試験の難易度よりもさらに高いことなどを報告している。

一方、資格・検定試験については、試験の実施団体が自らの試験について分析したものや予備校が受験生対象の雑誌で各資格・検定試験の特徴をまとめたものなどは存在しているが、まだ十分な研究は行われていないのが実情である。

そこで本研究では、英語の入試問題においては読解が中心となっていることを鑑み、各資格・検定試験で使用されている長文読解用の英文を分析し、文章と使用語彙の難易度を比較・検討することで、それぞれの資格・検定試験が持つ特徴と差異を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の方法

2.1 分析対象の英文

大学入学共通テストで利用される英語の資格・検定試験として大学入試センターに申請のあった試験のうち、以下の試験の長文読解用英文を対象とする。なお本論文では 250 語以上の英文を長文読解用の英文と定義する。

- ① 英検 (2級) ② GTEC (Advanced)
- ③ TEAP (以上, 日本の実施団体)
- ④ IELTS (アカデミック・モジュール)
- ⑤ ケンブリッジ英検 (PET: Preliminary English Test) ⑥ TOEFL (以上, 海外の実施団体)¹⁾

それぞれの試験の分析に使用した英文は以下の通りである。

英検: 2017 年度第 2 回 2 級用問題

GTEC: Advanced のサンプル問題

TEAP: ウェブサイト²⁾ で公開している見本問題

TOEFL: 「ETS 公認ガイド TOEFL iBT (第四版)

CD-ROM 版 Educational Testing Service (ETS) 日本語版監訳 林功 出版社 McGraw-Hill 出版 2013」に掲載されているリーディング演習問題 ①～③

IELTS：ウェブサイト³⁾で公開されているアカデミック・モジュールのサンプルテスト

大学入学共通テストの英語試験は 2023 年度までの実施は決まっているが、それ以降については資格・検定試験の実施・活用状況等の検証後に決められることになっている。大学入学共通テストの英語試験が実施されなくなった場合、資格・検定試験が大学入学共通テストや個別試験の代替の試験として利用される可能性もある。そのため現行のセンター試験（2017 年度本試験）と東北大学の個別試験（2017 年度前期）の長文読解用英文も比較のため本論文の分析対象とした。

なお問題に使用されている 250 語以上の英文については下線、記号、番号等、問題作成者によって付加されたものは取り除き、また空欄に単語、語句、文章などを補充する問題がある場合には、空欄に正解を入れた上で文章の難易度の調査を行った。

また注釈のついている語は、たとえ難しい語であっても受験生にとってはすでに意味のわかっている語となるため、語彙の難易度の分析の際には、上記の処理を行った文章からすべて削除した上で分析を行った。

2.2 分析方法

長文読解用英文の難易度は「文章の難易度」と「語彙の難易度」の二つの観点から測定を行った。

2.2.1 文章の難易度

文章の難易度を数値化するために Lexile Measure⁴⁾を使用した。Lexile Measure は米国 MetaMetrics 社が開発した指標で、「一文あたりの長さ」と「単語の出現頻度」で文章の難易度を測定する。一文の長さが長く、各単語の出現頻度が少ない文章は難易度が高く、

一文が短く、各単語の出現頻度が多い文章は難易度が低いという考えに基づく指標である。この指標は 900L, 1000L のように数値に L の記号を付けて表され、数値の大きい方が難易度が高い。例えば大田（2016）によれば、高等学校のコミュニケーション英語Ⅱの検定教科書（内容が難しめで 1 レッソンの分量も多いタイプ）の平均は 915L となっている。この指標は、文章の難易度と読み手の読解力を同じ指標で表すことができるため、読み手の読解力に合ったテキストを探すときなどに海外で広く活用されている。手順としてはテキストファイル化した調査対象の英文を Lexile Analyzer⁵⁾ という分析ツールにかけ、Lexile Measure を算出した。この指標は元々英語母語話者を対象にしたものなので、外国語としての英語学習者に対しても同じように適用できるのかどうかは今後の検証を待たなくてはならないが、同じ単語がどの程度繰り返し使われているかという英文の表現上の観点も考慮した指標であるため、本研究では主たる指標として採用した。

また英語圏の教育関係者によって一般的に使用されている Flesch Reading Ease と Flesch-Kincaid Grade Level の二つの指標も妥当性検証のために利用した。これらの指標は、「一文あたりの長さ」と「一語あたりの平均音節数」を元に各々の公式に基づいて算出される。一文の長さが長く、単語の平均音節数の多い文章は難易度が高く、一文が短く、単語の平均音節数が短い文章は難易度が低いという考えに基づく指標である。Flesch Reading Ease のスコアは 0 から 100 までの数値で表され、60～70 が標準的な難しさで、数が小さいほど英文が難しいことを表す。2017 年度センター試験の第 6 問の英文は 67.1、2017 年度東北大学前期試験 1 番の英文は 50.2 であった（表 8、表 9 参照）。

また Flesch-Kincaid Grade Level は Flesch Reading Ease の公式に改良を加えたもので、結果が米国の学年の児童・生徒の読解レベルを表す値で示さ

表 1 資格・検定試験別難易度平均一覧

	大問数	総延べ語数	平均語数	英文難易度			語彙難易度		
				Lexile	Flesch	F-K-G	平均難語数	難語率(%)	カバー率(%)
英検 (2級)	4	1237	309.3	1022.5	60.8	8.6	3.0	2.2	97.9
GTEC (Advanced)	3	1190	396.7	936.7	67.2	7.8	0.0	0.0	100.0
TEAP	4	1687	421.8	1042.5	53.3	10.2	4.8	2.2	97.8
IELTS	3	*2150-2750	642.8	1220.0	50.7	11.3	20.4	7.5	92.5
TOEFL	3	1941	647.0	1213.3	43.0	12.2	27.7	9.7	90.3
ケンブリッジ英検 (PET)	3	1350	450.0	1146.7	61.2	10.0	3.0	1.2	98.8
平均	3.3	1593-1693	477.9	1096.9	56.0	10.0	9.8	3.8	96.2
(参) センター試験	3	1770	590.0	963.3	68.4	7.7	0.0	0.0	100.0
(参) 東北大学	2	1763	881.5	1235.0	46.7	12.1	30.0	8.5	91.5

* IELT はウェブサイト⁷⁾に「長文は3題出題。全体で2150-2750words」と記述があるため総延べ語数にはこの値を記載。

れるもので、「6」は小学校6年生レベル、「9」なら中学3年生レベルの英文であることを表す。2017年度センター試験の第6問は 8.4 なので中学2年、2017年度東北大学前期試験1番の問題は 11.8 なので高校3年生直前程度となる。Flesch Reading Ease と Flesch-Kincaid Grade Level は Word の校閲機能にも使用されており、機能をオンにすればスペルチェック後に「読みやすさの評価」としてスコアが表示される。これらの測定にはネット上で公開されている Readability Formulas⁶⁾ の Automatic Readability Checker を使用した。

2.2.2 語彙の難易度

語彙の難易度を数値化するために「単語レベルチェッカー」⁷⁾ を使用した。「単語レベルチェッカー」では中学・高校の検定教科書とセンター試験10年分(2008-2017 本試験のみ)の単語データベースを基に英文の単語レベルチェックを行った。各問題で使用される英文の延べ語数と異語数、難語数を求め、英文中の異語数における難語数の比率(難語率)と高3までの教科書及びセンター試験で使われる単語で英文がどの程度カバーされているかというカバー率を調査した。なお本論文ではこのデータベースに入っていない語、すなわち「中学・高校の教科書で学んでいる単語、及び過去10年間のセンター試験で出題された単語以外の語」を難語と定義する。また難語数は文中に繰り返し出現しても1つと数える異語数で数えた。

3. 結果

3.1 概況 (表1参照)

3.1.1 文章

Lexile Measure の平均がセンター試験と最も近かったのは GTEC であった。英検、TEAP はセンター試験よりやや難しく、次いでケンブリッジ英検、TOEFL、IELTS と難しくなっている。IELTS と TOEFL は 1200L を超えているが、これは東北大の前期個別試験問題の難易度(1235L)に近い。他の二つの指標でもほぼ同じ傾向を示している。Flesch Kincaid Grade ではセンター試験と GTEC がアメリカの中学1年生レベル、英検が中学2年生、TEAP とケンブリッジ英検が高校1年生、IELTS が高校2年生、TOEFL が高校3年生レベルであった。

3.1.2 語彙

総延べ語数は GTEC、英検の 1200 語前後から IELTS の 2450 語まで、およそ2倍の開きがある。ケンブリッジ英検を除いて海外に本部のある実施団体(以降海外団体)の試験の方が延べ語数が多い傾向が見られる。大問1問あたりの平均延べ語数も英検、GTEC、TEAP がそれぞれ 309.9、396.7、421.8 であり、ケンブリッジ英検が少し多い 450、そして IELTS、TOEFL がそれぞれ 642.8、647.0 と海外団体の方が長めの英文を出題している傾向がある。センター試験の総延べ語数は 1770 語であり、これは調査した資格・検定試験の平均延べ語数 1642.5 に近い。またセンター試験の大問1問あたりの平均延べ語数は 590 なのでこれは海外団体の試験の延べ語数に近い。

高3までの教科書とセンター試験の語彙データベースでのカバー率は、GTEC が 100%、英検、TEAP、ケンブリッジ英検もほぼ 100%であり、1題あたりの難語数も 0 から 5 語程度である。それに対し IELTS と TOEFL のカバー率はそれぞれ 92.5%、90.3%とやや開きがある。この二つのカバー率は東北大学の 91.5%に近い。また1題あたりにつき 20 語を超える難語も含まれている。

3.2 資格・検定試験ごとの特徴

3.2.1 英検

表2 難易度一覧(英検)

英検	延べ語数	英文難易度			単語レベルチェッカー			
		Lexile	Flesch	F-K-G	異語数	難語数	難語率	カバー率
2A	259	990	61.6	8.5	131	1	0.8	99.2
2B	258	980	65.4	7.7	113	5	4.4	95.6
3A	359	1020	56.6	9.2	158	1	0.6	99.4
3B	361	1100	59.6	9	176	5	2.8	97.2
総計	1237				578	12		
平均	309.3	1022.5	60.8	8.6	144.5	3.0	2.2	97.9

(文章) 2A、2B の英文はそれぞれ 260 語程度で Lexile Measure が 990L と 980L とほぼ同じレベルであった。また 3A、3B の英文もともに 360 語程度で Lexile Measure が 1020L と 1100L とほぼ同じレベルであった。他の二つの指標にも同じ傾向が見られるので、2つある大問ごとに分量、難易度がほぼ同じの2種類の英文を使用していることがうかがえる。Flesch Kincaid Grade によれば、だいたいアメリカの中学1年生から中学3年生のレベルの難易度である。(語彙) 1題に難語がせいぜい数語あるだけなので、ほぼセンター試験並みと言える。

3.2.2 GTEC

GTEC	延べ語数	英文難易度			単語レベルチェッカー			
		Lexile	Flesch	F-K-G	異語数	難語数	難語率	カバー率
1	397	950	65.6	7.7	185	0	0	100
2	318	1300	43.4	12.9	167	0	0	100
3	475	560	92.6	2.9	203	0	0	100
総計	1190				555	0		
平均	396.7	936.7	67.2	7.8	185.0	0.0	0.0	100

(文章) 出題されている3問の難易度に大きな差があることが特徴である。この点はセンター試験の構成と似ている。2番の Lexile Measure の 1300L は今回調査した資格・検定試験のすべての問題の中で最も難易度が高く、3番の 560L は最も難易度が低い。センター試験の平均的な難易度と同程度の難易度の英文が一題、そしてその問題よりかなり易しい英文が一題とかなり難しい英文が一題出題され、平均するとほぼセンター試験と同レベルの難易度となっている。Flesch Kincaid Grade ではアメリカの小学校2年生から高校3年生のレベルであった。

(語彙) 語彙についてはすべての問題で難語が0であった。

3.2.3 TEAP

TEAP	延べ語数	英文難易度			単語レベルチェッカー			
		Lexile	Flesch	F-K-G	異語数	難語数	難語率	カバー率
3A1	270	980	58.6	8.8	141	0	0	100
3A2	274	1040	59.6	9.6	135	2	1.5	98.5
3B1	580	1150	50.6	11.1	253	8	3.2	96.8
3B2	563	1000	44.4	11.2	227	9	4	96
総計	1687				756	19		
平均	421.8	1042.5	53.3	10.2	189.0	4.8	2.2	97.8

(文章) 270 語前後のほぼ同程度の難易度の英文が2題と、延べ語数がほぼ倍の 580 語前後でやや難しい英文が2題出題されている。英検と共同開発ただけに、2つある大問ごとに分量、難易度がほぼ同じの2種類の英文を使用するという問題構成がとてよく似ている。ただし英検よりは問題間の難易度の差は少し大きくなっている。Flesch Kincaid Grade ではアメリカの中学2年生から高校2年生レベルである。

(語彙) 難語数はさほど多くはないが、後の問題に行くごとに少しずつ難語の使用が増えている。

3.2.4 IELTS

(文章) Readability の三つの指標ともだいたい同一の難易度の英文を使用している。IELTS が公開して

IELTS	延べ語数	英文難易度			単語レベルチェッカー			
		Lexile	Flesch	F-K-G	異語数	難語数	難語率	カバー率
1	336	1230	53.1	10.9	165	6	3.6	96.4
2	667	1240	50.5	10.9	309	16	5.2	94.8
3	550	1280	51.2	11.3	229	29	12.7	87.3
4	1104	1180	49.9	11.4	399	33	8.3	91.7
5	557.0	1170	48.7	12.1	240	18.0	7.5	92.5
総計	2150-2750				×	×		
平均	642.8	1220.0	50.7	11.3	268.4	20.4	7.5	92.5

*長文は3題出題。全体で2150語-2750語

いるサンプル問題は抜粋版となっており、かつ1回の試験での出題分よりも多く公開されている。ウェブサイト⁸⁾によれば、「文章の長さは全体で 2150 語～2750 語」と説明されているので、サンプル問題で公開されているような英文からいくつかを出題し、総延べ語数を統制していると推察される。なお表中の総計については中央値を使い 2450 とした。また異語数と難語数の総計欄については、1回分の試験の総計とならないため記入していない。Flesch Kincaid Grade ではアメリカの高校1年生から高校3年生レベルである。

(語彙) 難語数は6語から 33 語と問題によってばらつきがある。

3.2.5 TOEFL

TOEFL	延べ語数	英文難易度			単語レベルチェッカー			
		Lexile	Flesch	F-K-G	異語数	難語数	難語率	カバー率
1	664	1170	33.5	13.5	299	32	10.7	89.3
2	661	1220	41.8	12.2	271	24	8.9	91.1
3	616	1250	53.6	10.9	284	27	9.5	90.5
総計	1941				854	83		
平均	647.0	1213.3	43.0	12.2	284.7	27.7	9.7	90.3

(文章) 600 語程度で難易度が同等の英文が三つ使われている。Flesch Kincaid Grade では高校1年生から大学1年生程度となっている。なお IELTS と TOEFL の三つの英文については Lexile Measure と他の二つの指標で難易度の傾向が異なっている。

(語彙) 1題あたりの難語数が 20 語～30 語、カバー率が概ね 90%前後とやや低い。

3.2.6 ケンブリッジ英検

(文章) 分量も難易度もやや異なる三つの英文を使用している。Lexile Measure はセンター試験の平均的な難易度と比べてやや高めである。Flesch Kincaid Grade では中学2年から高校3年程度の英文が使用されている。

表 7 難易度一覧 (ケンブリッジ英検)

ケンブリッジ英検	延べ語数	英文難易度			単語レベルチェッカー			
		Lexile	Flesch	F-K-G	異語数	難語数	難語率	カバー率
Part 2	611	1070	61.7	9.2	253	6	2.4	97.6
Part 3	452	1270	44.7	12.7	236	3	1.3	98.7
Part 4	287	1100	77.1	8	148	0	0	100
総計	1350				637	9		
平均	450.0	1146.7	61.2	10.0	212.3	3.0	1.2	98.8

(語彙) 1 題あたりの難語数が 0 語～6 語, カバー率も 100% 近くとほぼセンター試験並みである。

3.2.7 センター試験

表 8 難易度一覧 (センター試験)

センター試験	延べ語数	英文難易度			単語レベルチェッカー			
		Lexile	Flesch	F-K-G	異語数	難語数	難語率	カバー率
4A	499	1220	50.1	11.3	200	0	0	100
5	678	600	88.1	3.3	581	0	0	100
6	593	1070	67.1	8.4	577	0	0	100
総計	1770				1358	0		
平均	590.0	963	68.4	7.7	452.7	0.0	0.0	100

(文章) 三つの問題の難易度の差が大きい。Flesch Kincaid Grade でアメリカの小学 3 年生から高校 2 年生までの幅がある。

(語彙) データベースの基準なのでカバー率 100% である。

3.2.8 東北大学

表 9 難易度一覧 (東北大学)

東北大学	延べ語数	英文難易度			単語レベルチェッカー			
		Lexile	Flesch	F-K-G	異語数	難語数	難語率	カバー率
1	994	1250	50.2	11.8	406	25	6.20	93.8
2	769	1220	43.2	12.3	324	35	10.8	89.2
総計	1763				730	60		
平均	881.5	1235.0	46.7	12.1	365.0	30.0	8.5	91.5

(文章) 難易度の高い同程度の英文が 2 題出題されている。Flesch Kincaid Grade ではアメリカの高校 2 年生から 3 年生レベルである。

(語彙) 難語が 1 題につき 25 語と 35 語と多い。カバー率も 90% 前後である。

4. 考察

4.1 文章の難易度

個々の資格・検定試験の問題ごとの特徴を見ると GTEC が 560L から 1300L, センター試験が 600L から 1220L と難易度に相当な幅があるのに対し, 英検は 980L から 1100L, TEAP が 980L から 1150L, ケンブリッジ英検が 1070L から 1270L, IELTS が 1170L から 1280L, TOEFL が 1170L から 1250L といずれも難易度に大きな幅はなかった。センター試験

と GTEC は幅広い学力の受験生に対応するため, このような難易度に幅のある構成になっていると思われる。また IELTS と TOEFL は他の資格・検定試験に比べると平均的に高めている。ウェブサイト⁹⁾によれば TOEFL は「アメリカ, イギリス, オーストラリア, ニュージーランド, カナダのほぼ全ての大学をはじめとした, 130 カ国 10,000 以上の機関が, TOEFL テストスコアを英語能力の証明, 入学や推薦入学, 奨学金, 卒業の基準として利用しています。」とあるように英語圏の多くの大学で留学志望者の英語力を計るために利用されている。また IELTS もウェブサイト¹⁰⁾で「イギリス, オーストラリア, カナダ, ニュージーランドのほぼ全ての高等教育機関で認められており, アメリカでも TOEFL に代わる試験として入学審査の際に採用する教育機関が 3,000 を超え, 英語力証明のグローバルスタンダードテストとして世界中で受験者が増え続けています。」とあり, TOEFL 同様に英語圏への留学志望者の英語力を証明する試験として利用されている。たとえば大学入学後に留学関係のプログラムに応募することを考えている受験生にはメリットとなる特徴といえる。従ってこれら二つの試験で使われる読解用の英文が, 他の資格・検定試験で使われる読解用の英文よりも難易度がやや高くなっているのは自然なことであると思われる。参考までに米国の学校の学年で難易度を表す Flesch-Kincaid Grade Level では IELTS が高校 1 年生から高校 3 年生レベル, TOEFL は高校 1 年生から大学 1 年生レベルとなっている。

ケンブリッジ英検は海外団体による試験であるが, ウェブサイト¹¹⁾によれば「日本の大学生の試験データをもとに 1980 年代に再開発された試験が, 今日の PET (B1 レベルの中級試験) の原型になっているなど, 日本の学校教育との相関性が高いことが分かります。」とあるように日本人学習者のデータを元に開発されたことがわかる。また英検のように受験級が細かく分かれているため, 英語圏への留学に利用する場合には, 今回の調査で使用した PET より難易度の高いファースト (FCE), アドバンスト (CAE), プロフィシエンシー (CPE) などを受験することが多い。そのため PET では TOEFL, IELTS ほど難しい英文が使用されていないと思われる。

表 10 は英語 4 技能資格・検定試験懇談会¹²⁾が運営する「英語 4 技能試験情報サイト」¹³⁾で紹介されている資格・検定試験と CEFR との対照表から今回調査対象とした試験を載せたものである。今回の調査で, 算出する段階の幅が広げれば使用する英文の難易度の

表10 資格・検定試験CEFRとの対照表 文科省 (H.30.3)

	A1	A2	B1	B2	C1	C2
英検 (2級)		←→				
GTEC (Advanced)	←→					
TEAP		←→				
IELTS			←→			
TOEFL			←→			
ケンブリッジ英検 (PET)		←→				

幅も広いというわけではないということがわかった。GTEC のように幅広い難易度の英文を使用して4段階に及ぶスコアを算出している資格・検定試験もあれば、IELTS のようにほぼ同一の難易度の英文を使用して B1 から C2 までの4段階のスコアを算出している資格・検定試験もある。各実施団体によって考え方、算出方法等が行っていることがわかる。また当然のことではあるが英検、ケンブリッジ英検のように、級別に分かれて問題を課す場合には対象となる段階は狭くなっている。

4.2 語彙の難易度

語彙については、国内の実施団体による資格・検定試験の英検、GTEC、TEAP と海外団体のケンブリッジ英検についてはほぼセンター試験と同等の難易度の語彙で構成されていたが、海外団体の IELTS と TOEFL についてはやや難語の使用率が高かった。日本の実施団体による資格・検定試験は主として日本で学校教育を受け、日本国内の大学への進学を考えている受験生を対象として設計されているのでセンター試験と同等の難易度の語彙で構成されているのは想像に難くないが、海外実施団体によるケンブリッジ英検 (PET) も同様にセンター試験と同等の難易度の語彙で構成されていることがわかった。

IELTS と TOEFL は 4.1 で述べたように英語圏の大学への留学志望者の英語力を証明するために利用されている試験であるため、使用語彙もその目的に叶うためのものとなっていると考えられる。

以上の結果からわかるように 2020 年度より本格的に大学入試で利用される各資格・検定試験の長文読解用英文の難易度にはかなりの差がある。大雑把に分類すれば、文章においては GTEC はほぼセンター試験と同レベルの難易度、IELTS と TOEFL が東北大の個別試験と同レベルの難易度、そして英検と TEAP、ケンブリッジ英検がその中間に位置する難易度であった。語彙に関しては IELTS と TOEFL が東北大の前期個

別試験と同レベルの難易度、それ以外に関してはセンター試験と同レベルであった。

また同程度の難易度の英文を複数使用している資格・検定試験もあれば、難易度に差がある英文を複数使用している資格・検定試験もあった。このような違いは、それぞれの資格・検定試験がどの程度の英語力の受験生を想定しているか、またどのような目的の試験なのか、どのような方法でスコアを算出するかなどの違いによって生じていると思われる。

5. 今後の課題

センター試験の後継である大学入学共通テストの英語問題は 2023 年度まで継続することは決まっているが、翌年度以降は未定である。もしなくなった場合には資格・検定試験がその役割を担う可能性が高いが、果たしてそこに問題はないのであろうか。今後、他の 3 技能の試験内容についても分析を行い、資格・検定試験を共通テストの代替の試験として利用することの是非について検証する必要があると思われる。その際に考えられる視点としては、例えばリスニングであれば、リスニング用の英文の難易度、ライティングでは、書かせる分量、テーマ、試験時間、スピーキングでは、試験時間、形式 (個人か集団か、対面かコンピュータか) などが考えられるであろう。

また IELTS と TOEFL の三つの英文とケンブリッジ英検の二つの英文については Lexile Measure と他の二つの指標で異なった難易度の傾向を示している。具体例をあげると TOEFL の 1 番と 3 番を比較すると、Lexile Measure では 1 番が 1170L、3 番が 1250L と 3 番の方が難しいと表されているが、Flesch-Kincaid Grade Level では 1 番が 13.5、3 番が 10.9 と 3 番の方が易しいと表されている。英文の難易度を形状面のみで数値化することの限界であると思われる。今回の分析において海外実施団体の試験にのみこの傾向が表れていることが単なる偶然なのか、それとも他の要因が影響しているのか、などは今後解明すべき課題として残っている。

なお今回の調査は、使用されている英文の難易度であって、読解問題の難易度ではない。たとえ難易度の高い英文を使用しても平易な問題を作ることは不可能ではないし、その逆も可能である。今後は問題内容の比較・検討、あるいは難易度の比較等の分析が求められよう。

また資格・検定試験の条件として「高等学校学習指導要領との整合性が図られていること。」(文部科学省、2017) とあるので、今後、各資格・検定試験の間

題は高等学校学習指導要領を念頭に置いて修正・変更が加えられる可能性がある。今研究はあくまで 2018 年 2 月 19 日段階で入手できたサンプル問題を分析した結果であることを最後に付け加えておきたい。

注

- 1) TOEIC については Part 7 の Multiple Passages では合計で 300 語以上の英文も出題されているが、ウェブ広告とそれに関連する内容の E メールなど、異なった様式の文書が組み合わされているものがほとんどである。そのため読解力以外の、例えば各文書の様式を理解した上で情報を採るなどの能力も問われる内容となっているため、本研究の調査対象からは除外した。ケンブリッジ英検の Part 2 も複数の英文で構成されている問題であるが、同じ様式の英文が続いて出ているため、受験者が通して長文を読むことが想定されるので調査対象として扱った。
- 2) <http://media.eiken.or.jp/teap/reading/teap_sample_reading.pdf> (2017.11.7)
- 3) <<https://www.ielts.org/about-the-test/sample-test-questions>> (2018.2.22)
- 4) <<https://www.lexile.com/>>(2018.3.4) 参照
- 5) <<https://lexile.com/educators/tools-to-support-reading-at-school/tools-to-determine-a-books-complexity/the-lexile-analyzer/>> (2018.2.22)
- 6) <www.readabilityformulas.com/flesch-grade-level-readability-formula.php> (2018.2.22)
- 7) 単語レベルチェッカー 2017 [CD-ROM] イーキャスト
- 8) <http://www.eiken.or.jp/ielts/test/pdf/info_for_candidates_japanese.pdf> (2018.3.7)
- 9) <<https://www.cieej.or.jp/toefl/toefl/index.html>> (2018.2.6)
- 10) <www.eiken.or.jp/ielts/merit/> (2018.2.6)
- 11) <<http://www.cambridgeenglish.org/jp/images/177172-for-schools-cos-relationship-flyer.pdf>> (2018.2.6)
- 12) 平成 26 年 12 月に 4 技能にわたるテストの学校の授業や大学入学者選抜等における活用を促進することを目的に文部科学省に発足した「英語力評価及び入学者選抜における英語の資格・検定試験の活用促進に関する連絡協議会」に参加する 6 つの試験運営団体による懇談会。教育関係者、受験者、保護者等に、ポータルサイトの運営や指針作り等を通して、適正かつ包括的な英語 4 技能試験の内容・レベル・活用事例等の情報提供を行うことを目的とする。

- 13) <http://4skills.jp/qualification/comparison_cefr.html> (2018.2.23)

参考文献

- 中條清美・長谷川修治 (2004). 「語彙のカバー率とリーダビリティから見た大学英語入試問題の難易度」
日本大学生産工学部研究報告 B, (37), 45-55.
- Jerry Greenfield (2004). “Readability Formulas For EFL” *JALT Journal*, Vol.26. No. 1, 5-24.
- 長谷川修治ほか (2011) 「中高英語教科書語彙から見た大学入試問題語彙の難易度」日本実用英語学会論叢 No.17, 45-53.
- 早坂 信ほか (2008). 「大学英語入試問題の調査研究」『紀要「言語・文化・社会」』第 6 号 139-229.
- Keita Kikuchi (2006). “Revisiting English Entrance Examinations at Japanese Universities after a Decade” *JALT Journal*, Vol.28, No. 1, 77-96.
- 木村真治・Brad Visgatis (1993) 「大学入試問題と高校英語教科書の難易度比較：リーダビリティの分析」*JACET 全国大会要綱*.32, 187-190.
- 清川英男 (1996). 「リーダビリティ公式とその応用」『現代英語教育』9月号 31-35.
- Laura MacGregor (2004). “Readability in English Entrance Examinations” 『紀要「言語・文化・社会」』第 2 号, 139-200.
- 文部科学省 (2017). 「大学入試英語成績提供システム参加要件」(平成 29 年 11 月 1 日) 第 4-4
- 大田悦子 (2016). 「Lexile Measure を用いた中高英語教科書の難易度比較」*白山英米文学* 41 号, 1-20.
- 谷 憲治 (2008). 「大学入試センター試験語彙と高校英語教科書の語彙比較分析」*日本実用英語学会論叢* No.14, 47-55.
- 根岸雅史 (2015). 「Lexile Measure による中高大の英語教科書のテキスト難易度の研究」*ARCLE REVIEW* No.9, 6-16.